

中国語訳『鍵』のイデオロギーによるリライトについて

—性にかかわる表現を中心に—

尹 永順

(神戸大学大学院・国際文化学研究科博士後期課程)

The purpose of this paper is to elucidate how and why the translator rewrote the original text using the strategies of euphemism, abbreviation and deletion, based on André Lefevere's Rewriting theory in Chinese version of Kagi of Tanizaki Junichiro. In the Rewriting theory translator's ideology and dominant poetics are considered to be the two factors that determine the translation. Translator's ideology can sometimes be approved by translator himself or imposed by patronage. In the first Chinese version of Kagi in 2000, the translator uses these strategies in order to moderate the expressions for 'sex'. The translator who worries about the publishing environment made a decision to use these strategies although there was no demand from the publisher. In conclusion, translator's ideology played an important role in the translation process of Kagi.

はじめに

谷崎潤一郎の晩年期の代表作『鍵』(1956年)は中年夫婦の性を扱った作品で、発表当時社会的議論を呼び起こした問題作でもある。これは西洋では「一番売れてきた」(キーン 1997)作品であり、翻訳点数が最も多かったフランス語、イタリア語、英語圏ではいずれも1960年初期にすでに翻訳され、知識人を中心に反響を呼んだ。西洋において反響を呼んだ外的要因として、ジョージ・スタイナーは「戦後の文学にセックスの問題が大きく取り上げられるようになった」世界文学の歴史的偶然性を指摘した(村松・武田 1969:89)。

その一方、1960年代の中国と言え、反右派闘争、大躍進、その後の文化大革命という厳しい歴史時期が続き、性にかかわる作品に対する統制が厳しくなって、翻訳どころではなかった。やがて、50年近くたった2000年に『鍵』の初訳が『谷崎潤一郎作品集』の一作品として翻訳されたが、その中国語訳における性にかかわる表現は婉曲化、簡略化、削除といった方略が用いられていて、全訳ではなかった。

本稿は、『鍵』の2000年の初訳と同一翻訳者による2010年の再翻訳を対象として、ルフェーヴルのリライト理論のイデオロギーと詩学を踏まえつつ、性にかかわる表現がどのようにリライトされた

YIN, Yongshun. "The effect of ideology on rewriting in the Chinese version of *Kagi*: Focusing on the content associated with 'sex' " *Interpreting and Translation Studies*, No.11, 2011. pages 123-137. ©by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

かを明らかにし、その原因を解明するものである。まず、第 1 章では『鍵』のあらすじと日本における評価を紹介し、第 2 章では中国語訳に見られる性にかかわる表現に対する婉曲化、簡略化、削除という方略について具体例を挙げながら説明する。第 3 章では理論的枠組みとなるルフェーヴルのリライト理論、及び本稿における概念規定を明らかにし、第 4 章ではリライト理論に基づいて、性にかかわる表現がリライトされた原因を解明する。

1. 『鍵』と日本における評価

『鍵』は谷崎潤一郎が 71 歳の時に書かれた小説である。『鍵』は相手が盗み読みすることを想定して夫婦の日記が交互に示され、いわば日記を通して「対話」を行う。夫の日記はカタカナと漢字表記で、妻の日記はひらがなと漢字表記で綴られている¹。体力も性欲も衰えた夫(56 歳)は嫉妬から欲求をかき立てるために、また妻(45 歳)を放恣な女にするために、娘の婚約者たる若い男を妻に近づかせるが、過度の興奮から健康を害してしまい、ついには脳溢血で命を奪われる。

『鍵』の発表当時、文学界では「ワイセツと文学の間」を特集し、賛否両論の批評が活発に行われた。国会でも「青少年保護の立場から」問題化し、政府側は「放任する考えはない」と答弁したが、結局直接的な取り締まりや警告は行われず(大久保 1983)、ベストセラーにまでなった。このような「ワイセツか芸術か」をめぐる議論は 1956、57 年前後にわたって活発に行われたが、「‘文学か猥褻か’のような批評は今日だれにも支持されないだろう」(バヤール=坂井 1998)。さらに、『鍵』は日本で 4 回(1959、1974、1983、1997)にわたって映画化され、1984 年にはフランス・イタリア合作で映画化された。

『鍵』には性行為自体の描写は見当たらず、「閨房の生活を巨細に述べても、もっぱら女性の肉体美に対する官能的陶醉が力をこめてうたい上げられているのみで」(以下旧仮名遣いは現代仮名遣いに変更)、「ポルノグラフィにつきもの」のような表現は見られないのであるが(吉田 1974)、性をめぐって展開されるため、作品の中には、「性交」、「淫欲」、「性欲点」のような表現が頻繁に現れる。

2. 『鍵』の中国語訳

『鍵』が西洋で翻訳され、反響を呼んだ 1960 年代と言え、中国はちょうど反右派闘争、大躍進が行われ、特に 1966 年から始まった 10 年にわたる文化大革命では性は完全にタブーとなってしまい、『鍵』のような作品は紹介されようがなかった。やがて、文化大革命が終わり、改革開放の政策も打ち出されたが、長年中国に深く根をおろしていた古い観念は一朝にして変わるものではなかった。それから、1983 年に『日本文学』という学会誌に「ポルノグラフィの描写がますます露骨になって、道徳にははずれた滓とも言うべきである」(李 1983)と初めて『鍵』が評価されたが、その初評価はネガティブなものであった。それ以降の『鍵』の評価も全体的にネガティブな傾向にあったと考えられる。1990 年代に入ると、社会主義市場経済の下で文学環境を含む中国社会の各分野に大きな変化がもたらされ、文学環境が開放的になり、性を扱った作品も現れ始めた。

そして、2000 年になって竺家榮訳の『鍵』(中国語訳:『钥匙』)が中国文聯出版社から出版され

た。性をめぐって展開された作品が翻訳出版できたこと自体が中国社会の大きな進歩であると言える。しかし、この初訳は全訳ではなく、性にかかわる表現や官能的陶醉で「ワイセツ」なイメージを与える箇所の翻訳を見てみると、婉曲化、簡略化、削除の翻訳方略が用いられており、露骨な性的イメージを緩和していることが分かる。それぞれについていくつかの代表例を以下に挙げていく(2000年版を TT1、2010年版を TT2 とする)。括弧の中は筆者による直訳である。

① 婉曲化:ここでは露骨な表現を遠まわしに言うことをさす。

例 1 ST: 近頃ノ僕ハ性交ノ後デ実ニ非常ナ疲労ヲ覚エル。ソノ日一日グッタリシテ物ヲ考ヘル気力モノクライニ。……(原文ママ)ソレナラ僕ハ彼女ノ性交ヲ嫌ッテイルノカト云ウト、事実ハソレノ反対ナノダ。(p5)

TT1: 近来, 房事之后感到十分疲劳。一整天都无精打采的。……那么我是不是討厭这事呢, 正相反。(近頃、房事の後、非常な疲れを感じる。一日中元気がない。……それなら僕はこのことを嫌っているかと言うと、その反対である)。(p101)

中国語にも「性交」という表現はあるが、翻訳者は「房事」という婉曲表現を使い、2回目に出た際は「性交」という表現を避けて、指示代名詞「このこと」で表している。このほかにも、「性交」が4回現れるが、「性交」という語をそのまま使ったのは一回のみである。

例 2 ST: (お医者さんは)そして件の箸の棒を以って、睾丸の根元の両側の皮膚の上を又さっきのように擦った。(p90~91)

TT1: 用筷子摩擦他的大腿根(箸で彼の太ももの根元を擦った)。(p151)

中国語では日常会話で「大腿根」という婉曲表現がよく使われるが、医学用語として婉曲表現を使うのは普通ではないので、翻訳者の婉曲化の意図が伺えるのではないかと考えられる。そのほかに、医者 の 検査で「睾丸」が5回出てくるが、フレーズごと削除されている。

② 簡略化: 詳細で、具体的な描写を要約して、露骨な表現を避けることをさす。

例 3 ST: 私は彼があまり猛烈に腋の下(性欲点であると前に述べている—筆者注)を吸い続けるので。(p26)

TT1: 由于他的動作过于激烈(彼の振る舞いがあまり猛烈だったので)。(p112)

③ 削除: 語、連語、フレーズ、さらには段落ごと削除して露骨な表現を避けることをさす。

例 4 ST: 僕ハ今後我々夫婦ノ性生活ヲ満足ニ続ケテ行クタメニハ、木村ト云ウ刺激剤ノ存在ガ缺クベカラザルモノデアルコトヲ知ルニ至ッタ。(p15)

TT1: 為了使今后的夫妻生活能令人滿意地持續下去, 木村這一興奮劑的存在就是必不可少的(今後の夫婦生活を満足に続けて行くためには、木村という刺激劑の存在は不可欠である)。(p107)

例 5 ST: ソシテ進ンデサマザマナ方法デ僕ヲ挑発シ、性欲点ヲ露出シテ行動ヲ促シタ。(p65)

TT1:而且主動用各種方法挑逗我, 鼓勵我。(そして様々な方法で僕を挑発し、激励してくれた)。(p134)

例 6 ST:私は凡そ何回ぐらい、彼を抱き締めしたかは覚えていない、が、私が何分間かの持続の後に一つの行為を成し遂げた途端に、夫の体が俄かにぐらぐらと弛緩し出して、私の体の上へ崩れ落ちてきた。(p88)

TT1:我不記得緊緊擁抱了几次, 突然間丈夫的身体猛然癱軟在我的身上(何回抱き締めたか覚えていない。突然夫の体が私の体の上に崩れ落ちてきた)。(p149)

例 7 ST:僕ハ彼女ヲ仰向キニサセ、臀ノ孔マデ覗イテ見タガ、臀肉ガ左右ニ盛り上ツテイル中間ノ凹ミノコロノ白サト云ッタラナカッタ。(p21)

この方略において、例 4 は「夫婦の性生活」の「性」が削除され「夫妻生活」になり、漢字による視覚的なショックを弱めたと考えられる。例 5、例 6、例 7 も性にかかわる箇所が連語、フレーズレベルで削除されている。さらには、気を失った妻に対する夫の「悪戯」、「女性の肉体美に対する官能的陶醉」の描写が 2 段落(2000 字程度、p22~23)完全に削除された箇所もあった。このような大幅な削除は同時期の翻訳作品でもまれである。

そして、『鍵』の初訳から 10 年経った 2010 年に上海訳文出版社から竺家榮による『鍵』の再翻訳が出版された。この再翻訳は全訳であって、初訳で簡略化、削除された箇所が殆ど補完された。上述の 2000 年版の例文と照らしてみると、2000 年版と同じように翻訳されたのは例 1、例 3、例 5 であって、ほかの例文は性にかかわる語彙や表現が殆ど翻訳されている。

例 2 TT2:接着他又用那根筷子在辜丸根部兩側的皮肤上, 像剛才那樣摩擦起来(そして、彼は件の箸で辜丸の根元の両側の皮膚をさっきのように擦った)。(p75)

ほかにも医者 の 検査で出てくる医学用語「辜丸」とその文章はすべて原作どおりに翻訳されている。

例 4 TT2:想要使我们夫妻今后的性生活能令人满足地持續下去, 木村这一興奮剂的存在就是必不可缺的(我々夫婦の今後の性生活を満足に続けていくためには、木村という刺激剂の存在は不可欠である)。(p11)

例 6 TT2:我不覺得緊緊擁抱了他几次. 不過, 就在我持續了几分鐘的快活、剛做完那个事儿后, 癱軟在我的身上(何回抱き締めたか覚えていない。だが、私が何分間の快感を持続し、あのことが終わった途端に、夫の体が急に私の体の上に崩れ落ちてきた)。(p73)

例 7 TT2:我還把她翻了个身, 讓她臉朝下趴着, 連臀部都没有遺漏地看了个遍……(私は彼女の体を覆して、顔を仰向きにさせ、臀までも漏れることなく覗いてみた)。(p16)

このように、2000 年版で削除された「性」や性にかかわる表現が大幅に補完されていることが分かる。段落ごと削除された箇所(p17~18)も補完されたが、紙面の関係で割愛する。さらに、原作、及び TT1 では暗示的に示されたのが明示的に翻訳された箇所も見られた。

例 8 ST:二十年来常に同じメソッド、同じ姿勢でしか応じてくれないと云ふのである。(p9)

TT2: 可是, 二十年来我總是用同一种方式和同一种姿勢来跟他做愛(しかし、私は 20 年来いつも同じメソッド、同じ姿勢で彼とセックスしてきた)。(p6)

以上のように、大幅に削除された性にかかわる表現がその 10 年後に殆ど全訳として出版されたことから、同一翻訳者による「性」の扱い方が時代によって異なっていることが判明した。このように、性にかかわる表現の翻訳で大幅な削除が行われたのは、その社会における性の捉え方やそれを文学作品にどのように描くかという意識に影響を受けていると考えられる。そこで、上述の翻訳方略が用いられた原因について、イデオロギーと詩学を中心に据えるルフェーヴルのリライト理論の枠組みを用いた説明を試みたい。「検閲という厳しいマクロ・コンテクスト的制約は、[……]恐らくイデオロギー的操作の最も明白な例であろう」とされるためである(マンデイ 2009:220)。

3. ルフェーヴル Lefevere のリライト Rewriting 理論

1970 年代以降から西洋の翻訳界では翻訳研究の焦点が目標テキストに移り、翻訳が行われた社会文化的文脈を中心とする「文化的転回」に注目が集まり始めた。そのうち、ルフェーヴルが提案したリライト理論は最も重要で代表的な翻訳理論である。

3.1 イデオロギーと詩学

ルフェーヴルによれば、「翻訳はもちろん起点テキストのリライト Rewriting である。すべてのリライトはその意図を問わず、特定のイデオロギーと詩学を反映し、特定の社会において何らかの方法で機能するように文学を操作する。リライトは操作であり、権力に奉仕する」(Lefevere 1992:VII)。リライトには翻訳、史料編纂、選集編纂、批評、編集、映画化・ドラマ化などの形態が含まれるが、とりわけ「翻訳は、誰が見てもはっきりと分かるリライトの典型である」(ibid.:9)とリライト理論に重きが置かれている。

ルフェーヴルは、翻訳によって映し出された文学作品のイメージを左右する要素を二つ取り上げた。この二つの要素とは、まずは翻訳者のイデオロギー Ideology で、これは翻訳者自身が認めたものであったり、または支援によって課せられたものであったりする。その次は翻訳が行われた特定の時期に目標文学において支配的な詩学 Poetics である (ibid.:41)。

イデオロギーの定義について、ルフェーヴルは政治的な領域に限定されず、我々の行動を秩序付ける形式、慣習、信条の絡み合ったものであり (ibid.:16)、また「特定の時代の特定の社会において受容可能だとされる考え方と態度から成る概念網であり、読者と翻訳者はそれを通してテキストに近づく」とする (Lefevere 1998:48)。

詩学は二つの要素からなっている。一つは、文学装置、ジャンル、モチーフ、プロトタイプ的な人物像もしくは状況、シンボルなどが含まれる。もう一つは、文学が全社会システムにおいてどのように機能するか、もしくは機能すべきかという概念である。後者は明らかに詩学領域外からのイデオロギー的影響と密接に結ばれ、文学システム環境でイデオロギー的要因によって記述される (Lefevere 1992:27)。詩学は教師、批評者らによって受容可能であるか否かが決定される基準で

ある (ibid.:36)。

簡単にまとめると、イデオロギーとは社会はどんなものであるか(べきか)に関わるものであり、詩学とは文学はどんなものであるか(べきか)に関わるものである。文化、すなわち社会は文学システムの環境であり、文学システムとその他のシステムは社会に属する。各システムは開放的であって、互いに影響しあう (ibid.:14)。

3.2 支援と専門家

文学システムが社会を構成するほかの下位システムから遠ざけないように二つの統制要因が作用している。文学システム外の支援Patronageと文学システム内の専門家Professionalである。

支援は、文学を読んだり、書いたり、リライトすることを促進したり妨げる権力(個人、制度)のことをさす。支援者Patronとなりうるのは、政治家階級、政党、王室、出版社、メディア、アカデミー、検閲機関、学会誌、教育機関などである。支援者は社会、すなわち文化を作り上げる文学システムとほかのシステムとの関係を統制しようとし、通常文学作品やその流通を規制する制度という手段を通して作用する (ibid.:15)。

文学システム内の専門家には、批評者、書評者、教師、翻訳者がいる。彼らは詩学とイデオロギーの支配的な概念を明らかに阻害する特定の文学作品を抑えることがある。しかし、もっと多くの場合、彼らは特定の時代と地域の詩学とイデオロギーに容認可能だと認められるまで文学作品をリライトする (ibid.:14)。

支援は通常文学の詩学よりもイデオロギーに関心を寄せる。そして、専門家を頼りにして文学システムが自らのイデオロギーに適合するようにし、詩学にかかわることは専門家に「権力を授ける」 (ibid.:14-15)。

このように、リライト理論において、翻訳を左右する二要素は翻訳者のイデオロギーと詩学である。支援は常にイデオロギーに関心を寄せ、詩学に関する権限を専門家に授ける。そして、支配的な詩学はイデオロギーによって決定される傾向にあって、イデオロギーが翻訳者の使用する基本的な方略を決定する (ibid.:41)。そのため、「翻訳プロセスのすべてのレベルにおいて、もし言語学的な考察がイデオロギーや詩学的な特質に関する考察と相容れないような場合は、傾向としては後者が勝る」 (ibid.:39)。

3.3 本稿での概念規定

上述のように、ルフェーヴルのリライト理論は従来の単純な言語レベルでの研究を越えて、翻訳をマクロ的な社会文化的文脈との関係から記述し、翻訳研究に新たな刺激を与えた。しかしながら、リライト理論には専門用語の揺れや曖昧さといった問題点も指摘されている。そのため、ルフェーヴルのモデルの主要概念の扱いが研究者によって異なるという事態が起こっている (Asimakoulas 2009:241-245)。例えば、中国では主に三要素(イデオロギー、詩学、支援)と二要素(イデオロギー、詩学)の二種類の捉え方が多く見られるが、本研究では馬・王(2008)に倣って、イデオロギーと詩学の二要素とする。その理由は、まず、「翻訳によって映し出された文学作品のイメージを左右

する」のは「二つの要素」(翻訳者のイデオロギーと詩学)であるとルフェーヴル自らが明らかに述べているからである。次に、政党、メディア、出版界、学会誌のような支援者は国家イデオロギーに統制されるとともに、国家イデオロギーは支援者によって支えられているため、ある意味では支援者はイデオロギーを反映するバロメーターである。詩学は支援の権限を受けた専門家によって統制されるため、専門家によってリライトされた作品を通してその時代の詩学のあり方を知ることができる。したがって、本稿では翻訳を左右する要素は翻訳者のイデオロギーと詩学にして、支援者はイデオロギーの状況と変化の表れ、同様に専門家は詩学の表れとして扱う。

さらに、専門用語の曖昧さに対する批判を受けて、本稿ではイデオロギーと詩学を再検討しておきたい。中国の指導思想であるマルクス主義において、イデオロギーは経済的土台(下部構造)とその上部構造としての観念との関係、階級社会における特定の階級の利益を正当化しようとする虚偽意識などの特徴があると考えられる。中国ではその後レーニン主義、毛沢東思想、鄧小平理論が取り入れられ、マルクス主義が中国化されているため、本稿ではルフェーヴルの定義の枠内で中国の国情を踏まえつつ、マルクス主義におけるイデオロギーの定義を参照して次のように定義する。

イデオロギーとは特定の社会において経済的土台を基にして生じた世界や社会に対する観念や信条の体系で、政治、法律、哲学、道徳などの思想が含まれるものとする。これが翻訳者を含む社会の一人ひとりに影響を与え、それぞれの価値観、道徳観、審美観が形成されるが、経済的土台とともに社会が変わると、翻訳者のイデオロギーも変わっていくと考えられる。そして、詩学とは「特定の時期において文学システムを支配する芸術的規範のことであり」(Asimakoulas 2009: 241)、すなわち、特定の時期における文学規範、文学(価値)観をさす。

中国では、1970年代のような一元的イデオロギー(政治イデオロギー)が確固たる位置にあった時期、詩学は絶対的に政治イデオロギーに従属するものであって、政治イデオロギーに合わない作品は翻訳出版されなかったため、翻訳プロセスにおいて翻訳者が介入する余地は大きくなかったと考えられる。しかし、1990年代以降からイデオロギーの多元化に伴って国家イデオロギーの絶対的な優勢が揺るぎ始め、ほかのイデオロギーと競合する状況に入った。イデオロギーの多元化は詩学の多様化を促し、「支配的な詩学」の概念がある程度曖昧になってきて、国家イデオロギーと詩学が常に釣り合うとは限らない。そこで、翻訳者は詩学に関心を寄せながらも、その一方で国家イデオロギーと、それに釣り合わない詩学とをいかにして調整するのかという問題に直面する。詩学に対する国家イデオロギーの関与が少なく、詩学の独立性が認められる社会状況であるほど、翻訳者のイデオロギーによる介入が目立たなくなると考えられる。このように、翻訳者のイデオロギーは国家イデオロギーの状況に応じて異なる介入が求められ、国家イデオロギーと詩学を調整する中で形成された動的なものであり、翻訳プロセスにおいて意識的に、もしくは無意識的に作用する。『鍵』の翻訳には翻訳者のイデオロギーの流動性が典型的に表れていると思われる。

したがって、本稿は中国社会のイデオロギーを踏まえた翻訳者のイデオロギーと詩学を中心に考察する。イデオロギーを支援する支援者としては、主に政党、出版社、学会誌を取り上げ、専門家は翻訳者、批評者、教師を中心として考察する。

4. リライト理論に基づく考察

以下は『鍵』の中国語訳において露骨な性的イメージを避けるために婉曲化、簡略化、削除という方略が用いられ、作品がリライトされた背景と原因について、中国のイデオロギーと詩学を踏まえて考察する。

4.1 性にかかわる中国のイデオロギー

毛沢東は「我が国のイデオロギーはマルクス・レーニン主義を指導方針とする社会主義イデオロギーである」と指摘した(毛 1986:768)。これは1978年以降から「一つの中心、二つの基本点」に発展してきた。一つの中心とは、「経済建設」のことであり、二つの基本点は「四つの基本原則(社会主義の道、人民民主独裁、中国共産党の指導、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想)」と「改革開放」の堅持であって、ブルジョア階級の自由化に反対することである。さらに、伝統的な儒家思想の礼教に基づく道徳観と倫理観が合流したと考えられる。儒教思想が国家イデオロギーとなった漢代以降から、統治者たちは礼(道徳)をもって国を治め、人々の思想と行動を支配しようとし、性に対する統制を厳しくした。このような主流イデオロギーの中心的な位置を守るために、憲法、及び法律や諸制度が設けられ、これがメディア、出版界など社会生活の各分野に反映されている。

国務院の直属機関である中国新聞出版総署は出版関係の事業を管轄する機関である。まず、「出版管理条例」には「憲法で定めた基本原則に反するもの」や「猥褻、賭博又は暴力を宣揚し、又は犯罪を教唆するもの」のような掲載禁止の内容が9項目あって、それを前提にして各項目が詳しく述べられている。色情・猥褻出版物について「法律を厳しくして、多くの読者、特に青少年の身心健康を守り、社会公德を擁護し、社会主義精神文明の建設を堅持するために」、規範性条例が三種類(1983、1988、1989年に制定したもの)設けられ、色情・猥褻出版物の認定基準から、管理監督方法まで詳しく書かれている。この類の作品の出版は新聞出版署の鑑定、許可が必要となり、違法な出版社は直接責任を問われる(中華人民共和国新聞出版総署ホームページ参照)。

一方、1992年1月に鄧小平による南方視察の講話「南巡講話」、同年10月には改革開放の再推進が指示され、社会主義市場経済が承認された。それ以降中国は経済発展に力を入れ始め、経済が急速な発展を遂げた。「中国経済の驚異的な急成長は、政治機構を含めての大規模な社会変革(市場経済に適応するための再編)を促すことになった。そして、文化・出版・メディア業界も市場価値を追求せざるを得なくなり、対応と自己変革を迫られた」(尾崎 2006:004)。このように市場経済の意識は社会文化の各領域に及び、異なるイデオロギーを反映する文化形態が現れるようになった。そのうち典型的な形態として「主流文化」、「インテリ文化」、「大衆文化」が共存する(洪 1999:386)。主流文化は社会主義の正統な価値観を反映するもので、政治思想性が高く、主に国によって支援されている。インテリ文化は社会における役割と位置づけが1980年代の中心部から周辺部へと移り、その代わりに、市場経済の直接産物である大衆文化が中心部を占めるようになって、それ以降の文化発展に大きな影響を与えた。この三つの文化形態は対立することもあれば、影響し合うこともある。

出版界でも市場経済体制に適応するための体制改革が進められ、各メディアの産業化が行われた。出版社は1994年以降国からの補助金が殆ど打ち切られ、企業化、独立採算制が進む中で、出版社の知名度と市場化による経済利益を追求するのが当務の急となった。出版物の選択の自由度もある程度高まり、図書の流通も全国統一流通から民間企業も営業許可が得られ、出版物と流通ルートの多様化が進んだ(尾崎 2006:012)。出版社は市場化の波に乗せられ、支援者としての独立性が高くなってきた。

その一方で、1995年に前国家主席江沢民は「出版物は特殊な商品であるため、完全に市場の調整に任せることはできない。ポルノ、腐敗的なものを防ぎ止め、一掃し、優れた出版物が市場を占めるようにする」べきだと指摘した(方・魏2008:408)。政治、社会構造の変化に応じて、主流イデオロギーによる統制力は明らかにゆるんだが、主流イデオロギーの介入は依然として存在し、経済利益と主流イデオロギーが相容れない場合は、後者が優先されると言えよう。

4.2 性にかかわる中国の詩学

イデオロギーの多元化は文学環境と文学構造にも変化をもたらした。経済市場化の確立は文学の市場化、商業化を促し、メディアの大衆化、インターネットの普及により文学環境が比較的になつた。従来の「文を以て道を載せ」る文学観が見直され、文学と政治が乖離する傾向が見られ、個性の解放を求めた作品が文壇に活気を与えた。長期にわたって議論的となった政治と文学との関係が1990年代に入って文学創作と商業的操作との関係に変わった(洪 1999:387)。中国文学史において初めて主流の文学的傾向と方向性のない現象が現れ、様々な文学的傾向が同時に存在して、多面的な価値観を反映するようになった(陳 1999:322)。作品は公然と政治権力を攻撃するものでない限り、殆ど何らかの方法で出版市場に出ることができる(洪 1999:386)。

翻訳界では1995年以降から日本の著名作家の作品がシリーズとして翻訳されるようになった。ノーベル文学賞受賞者の川端康成、大江健三郎をはじめ、三島由紀夫、村上春樹などの作品シリーズが出版された。とりわけ、1998年以降から村上春樹ブームが巻き起こり、日本文学が中国で注目される時期に入ったと考えられる²。

中国人の社会生活、価値観の変化に伴って、性意識にも変化がもたらされた(王 2004)。「もともと文学作品にあらわれた性表現は、その時代の人々の性意識の反映である」(奥野 1974)ように、90年代に入って作品の中に性が多く扱われるようになった。特に、90年代末は明末清初、新文化運動以降とともに、中国における性愛小説の三つの波であるとまで指摘された(楊 2007)。しかし、性を忌む中国の伝統的な儒教思想及び道徳観、特に国家イデオロギー下にある出版制度により、性を露骨に扱って中国新聞出版総署の定めた色情・猥褻出版物の認定範囲を超えた作品は「西洋文化の害毒を受けた、純潔ではない内容が含まれていて」、「青少年への悪影響、社会風習を乱す」といった理由で発禁とされることがある。例えば、賈平凹の『廢都』(1993年)や衛慧の『上海ベビー』(2000年)などがある。

翻訳出版も同様で、この類の作品の出版は中国新聞出版総署の許可が必要となり、許可された文学作品を無事に出版、流通させるために、出版社(編集者)、場合によっては翻訳者の判断によ

って、露骨な性表現を婉曲化、簡略化、削除することがよくある。例えば、渡辺淳一の『失樂園』(竺家栄訳 1998)、大江健三郎の『性的人間』(鄭民欽訳 1995/1999)、村上春樹の『ノルウェーの森』(林少華訳 1989/2001)などがある。

1998年に出版された『失樂園』は『鍵』と同一翻訳者によるものである。当時出版社から翻訳を依頼された際、翻訳者の竺家栄はどうしても気になる、また論争を招く恐れがある露骨な性表現の削除を出版社に申し出た。すると、出版社の編集者から出版する際に審査を受けなければいけないので、思う存分削除していいと言われ、作品全体の5%程度を削除したとする(黄 2010)。

その後、1987年に発禁とされたD・H・ロレンスの名作『チャタレイ夫人の恋人』の中国語訳が2004年に人民文学出版社から出版された。中国新聞出版総署が『チャタレイ夫人の恋人』の出版申請を承認したのはこれが初めてであるとされる。それにもかかわらず、翻訳者の趙蘇蘇は「作品の風格と完全性を損なわない前提に立って、数か所の性描写について適当に婉曲化と技術的な工夫(削除一筆者注)を行った」と指摘されている(趙 2004)。

4.3 『鍵』の翻訳出版における専門家と支援者

上述のような中国の社会情勢と出版事情を踏まえて、まず中国における評価を見てみる。

翻訳者、批評者、教師など専門家はその作品の受け入れ方や作品のイメージを左右することができる。特に、教師はどの作品を、どのように学生に学習させるかを決定し、学生の受容に影響を与えることがある。『鍵』が出版された2000年までの研究論文には『鍵』だけを扱ったものは見当たらず、谷崎潤一郎のほかの作品を紹介する傍ら『鍵』に触れた研究論文が4編あったが、いずれも手短にまとめられた程度である。そして、研究論文の執筆者は大学教員と研究所の文学研究者である。

研究論文には「ポルノグラフィの描写がますます露骨になって、道徳にはずれた滓とも言うべきである」(李 1983)、「強い刺激を求める生理学上の規則が文学に反映されると、刺激的な描写がますます露骨になって、人性から獣性に進んだ」(李 1987)、「過度な性欲に狂い、脳溢血を患ってしまった老人像を描く」(唐 1991)、「老夫婦の放蕩な性生活を描き、異端であると見なされる変態的欲望を美の対象として描き、称える」(彭 1992)と評価されたものがある。

そして、2000年に知識人をターゲットとする新聞誌「文匯読書周報」に「罪悪谷底有桜花」という『鍵』を紹介する文章が掲載された。それによると、『鍵』は谷崎潤一郎文学の様々な性倒錯の奥から人類が直面した性不能の難題を掲げた作品である。赤裸々な醜悪、怪誕、罪悪が描かれたが、手法と描写は美的である。作品は具体的なイメージを表現する行為や人物を描いたのではなく、全体的に抽象的なものを描いたと高く評価した。最後にはこのような思想性と文化的価値を兼ねた『鍵』がなぜまだ中国語に翻訳されないのかと疑問を投げかけた。

それに応えるかのように、同年に『鍵』が『谷崎潤一郎作品集』の一作品として中国語に翻訳された。この『谷崎潤一郎作品集』は4巻に分けて出版され、谷崎の各時期の代表作を殆ど網羅している。長編小説の巻『瘋癲老人日記』には『瘋癲老人日記』のほかに、『鍵』、『卍』、『少将滋幹の母』が収まり、4作品とも竺家栄訳である。

この作品集の監修者は葉渭渠で、副監修者は唐月梅と曹利群である。葉渭渠は中国社会科学院の教授を務め、川端康成の翻訳者、文学研究家として知られており、中国における日本文学研究分野の第一人者たる人物である。同じく社会科学院に勤める唐月梅は三島由紀夫の翻訳と研究で知られている。もう一人の副監修者である曹利群は中国文聯出版社の編集者である。「日本文学の翻訳出版は弊社の特色の一つである」とされる中国文聯出版社にはこの時期日本語の編集者がいなくて、その前に出版された日本文学は殆ど社会科学院の教授との合作によるものであった。日本文学の市場性を考えて翻訳出版を求めた出版社は、前に合作した葉渭渠と唐月梅に作品の選択から巻の分類、さらには翻訳者の選定までを委託したと考えられる。通常作家と作品の選定は経済利益の制約を受けることが多く、しかも出版社(編集者)の仕事であろうが、『谷崎潤一郎作品集』の出版においては支援者である出版社が専門家、特に中国の日本文学研究分野において威信のある専門家に権限を授けたと考えられる³。

この作品集には葉渭渠による「谷崎潤一郎の耽美主義特徴」という「序にかえて」がある。8000字にのぼる「序にかえて」は谷崎作品の青年期から晩年期にいたる主要作品とその特徴、及び文学観の変化をたどっている。作品集に収まった他の作品の詳しい紹介に比べて、『鍵』は性不能の主人公が妻を第三者に近づけさせ、嫉妬感をかき立てて妻に対する性欲を刺激しようとする作品であると評価されたのみで、晩年期の代表作については墨を惜しんで、控えめに提示している。文学価値や作品集のバランスを考えると『鍵』や『瘋癲老人日記』を谷崎文学の晩年期の代表作として取り上げたが、『鍵』は『瘋癲老人日記』の一作品にすぎないとして過度に注目されることを避けたと考えられる。

翻訳者の竺家栄⁴は国際関係学院(北京)で日本文学や文学翻訳の授業を担当する大学教員で、研究分野は日本近現代文学である。1998年の『失樂園』の翻訳をきっかけに、現在に至るまで30冊余りを翻訳している。

『鍵』は『失樂園』ほどの性描写は見られなかったが、その中国語訳は婉曲化や削除といった方略でリライトされ、特に段落ごと削除してしまう方法が非常に印象的である。段落ごとの削除について、翻訳者の竺家栄は、少し露骨であると考えたので、自分の判断により削除し、出版社側(監修者)からは何も言われなかったし、出版社に渡した翻訳原稿も修正されずそのまま出版されたとする。竺家栄の経験から言えば、特殊な状況を除いて、出版社は基本的に翻訳者の考えを尊重するが、日本語の編集者がいる出版社では修正が多く行われる場合もある。さらに、竺家栄は「自分の名声を気にする人である」ため、「当時(1998年)考えたのは、大学教員として、こんな内容(『失樂園』の性描写一筆者注)を訳したら、学生や同僚にあわせる顔がない」という配慮があったのである。竺家栄は、翻訳者のイデオロギーは翻訳者の背景知識、翻訳観、価値観が絡み合ったものであるとする。

翻訳者は翻訳が任せられた際たとえ直接的な外的働きかけがなくても、その作品の出版により論争を招くことや言語環境などマクロ的な社会背景を念頭に置いており、主流イデオロギーから逸脱しないように自己検閲により作品をリライトすることがある。

そして、10年後の2010年に上海訳文出版社から『鍵』を含む谷崎潤一郎の5作品⁵が単行本と

して再出版された。上海訳文出版社は名の通り、外国文学の翻訳を主に扱う出版社であり、村上春樹作品集の出版で名を知られている。上海訳文出版社は村上春樹のようなベストセラー作家や現代作家の作品のほかに、古典とみなされる日本の近代文学作品の翻訳出版にも力を入れている。古典とみなされる作品はその文学性と市場性から異なる形態(単行本、作品集など)で繰り返し出版されることがよくある。ここ数年間同出版社は谷崎潤一郎、夏目漱石、三島由紀夫を日本近代作家の代表として翻訳を進めている。再出版の際、時間の節約、そしてすでに知られているという市場認知度を考えて、すでにあった翻訳、そしてその翻訳が名家によるものであれば、それを採用することが多いとされる。再翻訳の際、翻訳の質を高め、そして前の出版社との違いを主張するために、誤訳を修正したり、訳されていなかった部分を補完したり、さらに潤色して「全訳本」として市場に出し、読者の興味を引くのである。

竺家榮による『鍵』の再翻訳では 2000 年版で削除された内容が殆ど補完された。この変化について、翻訳者は「今読み返すと、適切な表現であって、行き過ぎた箇所はない」と述べている(2010年8月11日)。そして、同年(2010年)に竺家榮による『失樂園』の再翻訳も全訳として出版された。『失樂園』の全訳にあたって、竺家榮は「今のような寛容的で、理性の中国社会であるからこそ『失樂園』の全訳が出版可能になったと述べ、中国の社会情勢が翻訳者の翻訳節度に与えた影響を認めている(竺2010)。『鍵』の編集者を務めた于靖も『鍵』の出版において文学環境への配慮は言及せず、主に読者層の違いについて述べている。つまり、同じ時期に翻訳された『陰翳礼讃』は日本文化全般に興味を持つ読者をターゲットとしているのに対して、『鍵』は日本文学に興味を持つ読者をターゲットとしているため、論争を招くような心配はないと指摘された。

このように、イデオロギーの多元化によって性を取り巻く環境がある程度開放的になり、それに伴う文学価値観の多様化によって文学における性の捉え方に変化がもたらされた。このようなイデオロギーと詩学の変化とともに翻訳者のイデオロギーは変わってゆき、それによる介入の度合いも異なってくると考えられる。

おわりに

2000 年に出版された『鍵』の初訳は全訳ではなく、性にかかわる箇所は婉曲化、簡略化、削除のような方略が用いられたが、2010 年の再翻訳は削除が殆ど補完され、二つの中国語訳におけるリライトの度合いは異なっていた。その原因をリライト理論のイデオロギーと詩学に基づいて考察してきた。

中国では、中国化されたマルクス主義と伝統的な儒家思想の下で従来から性に対する取り締まりが厳しかった。1990 年代以降、社会主義市場経済に伴う経済様式の多様化によりイデオロギーの多元化が進み、主流イデオロギーがある程度弱まって、ほかのイデオロギーと共存する状態になった。それに伴って文学環境にも変化がもたらされ、多元的な価値観を反映するような作品が次々と発表され、性を扱った作品も現れ始め、性をめぐる文学環境がある程度開放的になったと考えられる。このような市場経済化の下で出版社は支援者としての独立性が高くなり、出版物の選択の自由度もある程度高まって、出版社に知名度と経済利益をもたらすような出版物を出版しようとする。

その一方で、主流イデオロギーの規制力と影響力は依然として存在し、文学作品がその領域を逸脱しているか否かを見張り、逸脱すると介入が行われる。このような環境に置かれた翻訳者は作品の無事な出版と流通を保障するために、主流イデオロギーを侵すような箇所については、意識的に、もしくは無意識的に様々な翻訳方略を案じてリライトする。

2000年の『鍵』の翻訳出版において、支援者である出版社は作品の選択から翻訳にわたる全てのプロセスを専門家の監修者に権限を授け、翻訳プロセスにおいて翻訳者が大きく作用した。翻訳者は出版社から何の注文もなかったにもかかわらず、当時の出版環境を配慮して自発的に作品をリライトしたため、翻訳者のイデオロギーによる介入が目立つと考えられる。その一方、2010年に同一翻訳者により再翻訳された『鍵』は出版社(編集者)の企画によって完成されたものである。より開放的な文学環境に置かれた翻訳者は性にかかわる箇所について「行き過ぎた箇所はない」と評価し、再翻訳はほぼ全訳として出版されたが、この再翻訳では翻訳者による介入が目立たないと言えよう。このように、2回にわたる『鍵』の翻訳出版では翻訳者のイデオロギーは社会の変化とともに変わる動的なものであることが検証できたと見えよう。

【著者紹介】

尹 永順 (YIN Yongshun) 神戸大学国際文化学研究所博士後期課程在学中。中国電子科技大学日本語学部専任講師。中国における谷崎文学の翻訳と受容に関する研究に従事。

【注】

- ¹ 原作のカタカナ(夫)とひらがな(妻)の表記の違いについて、2000年の中国語訳では夫の日記は倣宋書、妻の日記は楷書でフォントを変えて区別しているが、2010年の中国語訳は同じフォントになっている。
- ² 中国で若者を中心に反響を呼んだ『ノルウェーの森』にも性描写がある。『ノルウェーの森』の初訳は1989年に漓江出版社から出版されたものであるが、村上ブームを巻き起こしたのはその10年後同出版社から初訳のまま再出版されたものであった。『ノルウェーの森』の初訳は翻訳作業が終了後すぐ出版することができなかつたとされる。主な原因は、作品にある性描写が1980年代末という比較的保守的な時代において批判的に見られていたからであった。出版社は最終的にある程度削除(1300-1400字程度)を行って出版を保証した(何2009)。同時に、翻訳者の林少華は訳者あとがきにおいて、「この類の描写は低俗、穢れを感じさせることはなく、嫌な連想や邪念を引き起こすようなこともない。その多くはある社会意識を反映し、成り行き 로맨チックな雰囲気と純真な心を持った青春の感傷が漂っている」と、村上作品の性描写を弁明するように述べている。1989年の初訳に削除があったために、2001年の上海訳文出版社の「全訳本」が却って注目を浴びようになり、村上ブームをさらに盛り上がらせた。このように、中国において「青春小説」、ベストセラーとしてすでに評価を得ており、日本文学の「経典」に位置付けられた『ノルウェーの森』に削除の殆どない「全訳本」が出されたのは錦上添花を添えることとしか認められないだろう。
- ³ 2005年に新世界出版社から葉渭渠著『谷崎潤一郎伝』が出版されたが、これは『谷崎潤一郎作品集』の副産物であると言えよう(葉2005)。新世界出版社の編集者によれば、谷崎潤一郎を選んだ理由は葉渭渠の推薦があったからであるとする。
- ⁴ 笹家栄の紹介はブログや新聞のインタビューによる。段落の削除、及び『鍵』の出版に関する情報は主に翻訳者に対するメールでのインタビューを参照した。ここに記して感謝する。なお、筆者の理解不足により生じた誤解はすべて筆者の責任に帰す。

- ⁵ 2010年に上海訳文出版社から出版された5作品は『陰翳礼讃』、『鍵』、『瘋癲老人日記』、『卍』、『少将滋幹の母』である。上海訳文出版社の紹介、及び『鍵』の出版に関する情報は同出版社の日本語編集者である于靖に対する電話でのインタビューを参照した。ここに記して感謝する。なお、筆者の理解不足により生じた誤解はすべて筆者の責任に帰す。

【参考文献】

- Asimakoulas, Dimitris (2009). Rewriting, In M. Baker and G. Saldanha (Eds.). *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, London: Routledge.
- バヤール＝坂井, アンヌ (1998) 「谷崎潤一郎論—『鍵』の不透明性と叙述装置」『国文学 解釈と教材の研究』43(6) 学燈社
- 查明建 (2003) 『意識形態、詩学与文学翻訳選択規範——20世紀50—80年代中国的(後)現代主義文学翻訳研究』 香港嶺南大学博士学位論文
- 陳思和 (1999) 『中国当代文学史教程』復旦大学出版社
- 方厚枢・魏玉山 (2008) 『中国出版通史』(9) 中華人民共和国卷 中国書籍出版社
- 洪子誠 (1999) 『中国当代文学史』北京大学出版社
- 黄俊 (2010) 「訳者竺家荣称翻訳全訳本‘需要勇气’」『労働報』1月15日
- キーン, ドナルド (1997) 「はじめに—海外における谷崎文学」『谷崎潤一郎国際シンポジウム』アドアーナ・ボスカロ(編) 中央公論新社
- Lefevere, André (1992). *Translation, Rewriting and the Manipulation of Literary Fame*, London: Routledge.
- Lefevere, André (1998). Translation Practice(s) and the Circulation of Cultural Capital, In S. Bassnett and A. Lefevere (Eds). *Constructing Cultures: Essays on Literary Translation*, Clevedon: Multilingual Matters.
- 李 芒 (1983) 前言『日本文学』第2期 唯美派特集 吉林人民出版社
- 李 芒 (1987) 「美的創作—論日本唯美主義文学」『外国文学評論』03期
- 林少華訳 (1989) 訳後記『挪威的森林』漓江出版社
- 馬峰・王琰 (2008) 「批評性解読改写理論」『外語研究』05期
- マルクス, カール (1967) 『マルクス経済学・哲学論集』河出書房
- 毛沢東 (1986) 『毛沢東著作選読』下冊 人民出版社
- マンディ, ジェレミー (2009) 『翻訳学入門』(鳥飼玖美子監訳) みすず書房
- 村松定孝・武田勝彦 (1969) 『海外における日本近代文学研究』早稲田大学出版部
- 大久保典夫 (1983) 『『鍵』論ノオト—‘教育’という視点』『国文学 解釈と鑑賞』48(8)
- 奥野健男 (1974) 「戦後文学における性意識の変遷」『国文学 解釈と鑑賞』39(14)
- 大島真木 (2002) 「海外における谷崎の翻訳と評価」『谷崎潤一郎と世紀末』松村昌家(編) 思文閣出版
- 尾崎文昭(編) (2006) 『‘規範’からの離脱』山川出版社
- 彭徳全 (1992) 「試論谷崎潤一郎の美学観」『日語学習与研究』2期

- 銭定平(2000)「罪惡谷底有桜花」『文匯讀書周報』第9期
- 唐月梅(1991)「美的創造与幻滅—論日本唯美主義文学思潮」『外国文学評論』01期
- 王 輝(2004)「改革開放以降の中国人の性意識の変容およびその形成要因についての考察」名
古屋商科大学外国語学部
- 文潔若(1990)「唯美主義作家谷崎潤一郎」『日語学習与研究』1期
- 楊経建(2007)「性愛叙事:文学史意義上の価値建構??論中国文学史上三次性愛文学創作浪潮」
『学术界』06期
- 葉渭渠(2000)『谷崎潤一郎作品集』4巻 中国文聯出版社
- 葉渭渠(2005)『谷崎潤一郎伝』新世界出版社
- 尹永順(2010)「中国における谷崎文学の翻訳と受容の変遷—作品の選択と評価を踏まえて」『通
訳翻訳研究』10号
- 吉田精一(1974)「谷崎潤一郎—『鍵』を中心として」『国文学 解釈と鑑賞』39(14)
- 趙蘇蘇訳(2004)訳者あとがき『查泰萊夫人的情人』人民文学出版社
- 竺家榮訳(2010)序『失樂園』作家出版社

【作品】

- 谷崎潤一郎(1966～1970)『谷崎潤一郎全集』17巻 中央公論社
- 谷崎潤一郎(2000)『瘋癲老人日記』竺家榮訳 中国文聯出版社
- 谷崎潤一郎(2010)『?匙』竺家榮訳 上海訳文出版社

【ウェブサイト資料】

- 何映宇(2009)「林少華的村上春樹」『新民周刊』1月19日
http://xmzk.xinmin.cn/xmzk/html/2009-01/19/content_311070.htm (2011/10/29)
- 葉渭渠プロフィール:
http://baike.baidu.com/view/405655.htm?fr=ala0_1 (2010/8/30)
- 中華人民共和國新聞出版總署ホームページ:
<http://www.gapp.gov.cn/cms/html/21/396/200601/447334.html> (2010/8/30)
- 竺家榮ブログ: <http://zhjr930.blog.163.com/> (2010/8/30)

